
恋罪花 ~罪に咲く花~

来羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋罪花～罪に咲く花～

【NZコード】

NZ492N

【作者名】

来羽

【あらすじ】

「十四年前に失踪し、死亡した貴方の姉が貴方の狙われる理由だ

」

突如黒い影に襲われ、助け出された少年は恩人にそう告げられる。姉の残した鍵を手放さなければまた狙われる、と鍵を渡すよう言つ恩人の言葉を少年は姉を弔いたい一心で跳ね除ける。同行を了承した恩人に誘われた闇の中、少年は何を見るのか。ひそやかに花開く罪の花にまつわる現代ファンタジー。

— 夜闇（前書き）

この話は一般的にタブーとされる関係を取り扱いますので、R15とします。
また、死体等の残酷描写も出でますので、苦手な方はご注意ください。

一 夜闇

人影が、襲い掛かってくる。

追いかけてくる複数の気配に必死に逃げるが、それはどんどんと近づいてきた。

刹那、右足に痛みが走り、転んでしまつ。

見下ろすと、何か黒いものが突き刺さっていた。じわり、と広がる熱い液体。

痛みに立ち上がることができず、震えていると、眼前に追っ手が立つ。

人の形をした闇。

その手が胸に伸ばされるのを恐怖で凍りついたまま呆然と見上げる。黒い指先が胸に触れようとした瞬間。

何かが初春の夜気を切り裂いた。

それは人影に突き刺さる。

驚きに目を見開いていると、鋭い音を立てて、他の人影に向かっても投げられていく。

次々と襲ってきた人影が倒れていった。

そして人の形をした闇は声もなく、消えた。

その場に残つたのは読むのが困難なほど達筆な文字の書かれた短冊と、地面に刺さつた木片。

常軌を逸した光景に混乱していると、背後から人の気配。動けないでいるどぐい、と頤を持ち上げられた。

目に入ったのは、月白の髪に硝子玉の瞳。

異形。

この世のものではないような美しい人間の形をしたものは、冷ややかに告げた。

「お前は狙われている。死にたくなかつたら私と共に来い、みむらすみ三村朱雀」

広くもなく、狭くもないホテルの一室。

公園で助けられ、そのままここに引きずられてきた。

白々とした螢光灯の光が、今はありがたい。

助けてくれた恩人は無言で朱雀をベッドに座らせると、バスルームへ消えていった。

水音がし、戻ってきたその人の手には湯の張られた洗面器と、白いタオル。

「傷を見せろ」

言われて恐る恐る乾いた血でごわつき、ひどく破れたジーンズの裾を捲り上げると、そこにあつたのは無残な傷。

まだ薄く血を滲ませる傷に、忘れていた痛みがよみがえってきて、眉をしかめる。

「…沁みるぞ」

タオルを湯で濡らし、白い手がそつと血をぬぐっていく。褐色に固まって肌に張り付いていた血をすべて綺麗に拭い去ると、ベッドの横に置かれていた黒のビールのショルダーバックから、手のひらに収まるくらいの大きさの、漆塗りの平たく丸い箱を取り出した。

ふたを開けると、濃い緑色の軟膏のような物がたっぷりと入っている。

「薬だ。沁みるから覚悟しておけ」

中指と薬指で薬を掬い、冷ややかに言わされて思わず目をきつく閉じる。

傷に冷たい薬が触れ、痺れるような痛みと、血が沸騰するような熱さが全身を駆け巡った。

宣言どおりの痛みに、歯を食いしばっていると、それが唐突に消えた。

恐る恐る目を開けて傷を見てみると、そこにあつたのは滑らかな肌。傷は全く見当たらぬ。

思わず恩人の顔を見上げ、目で問い合わせるが、答えは返つてこない。嘘のように消えてしまった傷に、それがあつたことさえ疑わしく思えてくるが、破れたジーンズと、血に汚れたタオルがその存在を証明している。

呆然としていると、この部屋の主は淡々と片づけを済ませ、お茶を淹れていた。

備え付けの緑茶の入った茶碗を渡され、その温かさに人心地つく。先程の事といい、傷の事といい、普通の人間とは思われない恩人の顔を朱雀は恐る恐るうかがつた。

何も表情を浮かべていまい、冷ややかな双眸そうぼう。

それを見ていると自分までも無機質な何かになってしまったようで居心地が悪い。

失礼だとは思いつつも目を伏せて、言葉を紡ぐ。

「あの…助けてくださってありがとうございました。それで僕が狙われているってどうして…？」
それだけが、わからなかつた。

朱雀は普通の高校生だ。

艶やかな肩まである漆黒の髪と、その端整な容貌こそ人目を引くが、他は特に変わつたところもない、平凡な少年。あんなものに襲われる覚えは全くない。

問い合わせにその人はこちらに視線を向けた。
す、と腕を伸ばして、

「その鍵だ」

朱雀の胸を指差した。

そこには服に隠れて見えないがチエーンに通した鍵がかかっている。誰にも見せたことがないその存在が理由だと言わされて、

「なんで！これは姉さんのものだ！」

叫ぶと酷薄な声がうなづく。

「ああ。三村萌黄。十四年前に失踪し、死亡した女性の残したものだ」

「 つ！」

行方不明の姉を死亡した、と決め付けられ、必死でかぶりを振る。半ば悟っていたこととはいえ、他人に言われれば辛い。

それを意に介さず、その人は続ける。

「三村萌黄は生前、貴方を狙つたものと同じものに狙われていた。その原因是その鍵があれば手に入る。それを狙つているんだ。奴らは。その鍵を私に渡せば貴方が狙われることはもうない。

あいつらと私には因縁がある。処理するためにも渡して欲しい」手を伸ばされ、後ずさる。

わけもわからず、姉が残したものを渡すのは嫌だった。

「…どうして姉さんがなんものに襲われなきゃいけない。姉さんは普通の高校生だった」

姉が失踪したのはこの春休みを終えれば高校三年生になる朱雀が三歳の時。

姉の全てを知っているわけではないが、危ないことになど関わらない、普通の人であつたことは記憶の中に臍おほらにある。

鍵を握り締め、硝子玉の瞳を睨みつけると、ひそやかな溜め息が聞こえた。

こちらの反応を疎むそれにひるまず睨みつけていると、諦めたように小さな唇が開かかる。

「三村萌黄は生前、貴重な種子を手に入れていた。それを失踪時持ち去り、自分の遺体とともににある場所に葬った。そこを開く鍵がその鍵だ」

「貴重な種子って…麻薬、とか？」

犯罪に関わることか、と問うと今まで表情をほとんど浮かべなかつた美貌があからさまに恥々しげに歪んだ。

「…そんな可愛らしいものならどれだけいいか。少なくとも麻薬なら警察が動いてくれる。あれは法の範疇外にある植物だ」
わけのわからない答えに、混乱する。

が、木片が刺さると同時に消え去った影を思い出し、

「僕を襲つた、あれは何？あの木の欠片は、貴方が投げてくれたんでしよう？」

「…………式神しきがみだ。ある人間ひとのな」

常識から外れた答えに、どこか納得する。

あれは普通のものではなかつた。

「式神つて漫画とか小説に出てくるやつ？」

「ああ。有名どころでは安部清明の十一神将だな。それと似たようなものだ。もつともあれはもつと粗悪品だが」

「貴重な種子というのも、その不思議なもののか類なの？」

「…ああ」

肯定に、うなだれる。

何もかもが今までの生活からかけ離れている。

記憶の彼方による姉が、ますます遠くなつたような気がした。

「…その種子の名前は何？」

長い沈黙が流れる。

「…………恋罪花れんざいか。罪に咲く花だ」

聞いたことのない名前。

もしかしたら姉が何か自分には残していくくれたかもしれないという希望も潰える。

「…わかつただろう。これは普通の生活を送つてきた貴方の手に出来る話じやない。鍵を渡してくれれば種子は私が処理する。……貴方の姉の遺体も、できる範囲で持ち帰ろ」

遺体、と聞いては、と顔を上げる。

そんな大切なことを、他人任せにするわけにはいかない。

「嫌だ。僕も行くよ。姉さんの遺体をちゃんと弔いたい」

当然の願いに、細い眉が跳ね上がる。

「危険だぞ」

「それでも、だよ。…姉さんを弔う氣があるのは、僕だけだから」
姉が失踪してから、まるで姉が初めからいなかつたように振舞う両親に絶望を覚えてきた朱雀は言い募る。

「……お前が知っている姉の姿が壊れても？」

「それでも、姉さんに会いたい……！」

固い決意をこめて冷たい瞳を見上げると、深い溜め息がこぼされた。

「…何を見ても知らんぞ」

遠まわしなく述の返事に、うなずいた。

急遽運び込まれたエキストラベッドの中。

朱雀はきつく瞼を閉じてもぐりこんでいた。

自分の家に帰る、と言った朱雀に恩人は「死にたいのか」と言った。
いわく、この部屋には恩人が張つた結界があるから式神たちは侵入してこられないが、外へ出た途端間違いなく襲われる、と。
そう言われて帰れるはずがなく、見知らぬ人間と一緒に過ごすことになつたのだった。

緊張と興奮から眠れない、と思っていたのも束の間、高ぶる神経に対して体は疲れていたのか、眠りに引きずり込まれた。

広がるのは一面の闇。

上下さえわからぬそこに立ちぬく朱雀を、優しい声が呼ぶ。

『朱雀、じゅらくへいりつしゃい』

失った、自分を慈しんでくれる声。

「姉さん！」

ぽんやりと浮かぶ姉の微笑みに向かって駆け出すが、走つても、走つても、たどり着かない。

そのうち、四肢に疲労が纏わりつき、膝を付ぐ。

「姉、や…」

姉の微笑みは搔き消え、変わつて浮かぶのは、両親の姿。

『ねえさんはどこ？』

姉の居場所を泣きながら問う自分の声が聞こえる。

それに返されるのは無情な言葉。

『朱雀、お前は一人っ子だ。姉さんなんていない』

姉のことを口にした途端、一人の表情は冷たくなり、隠しようのない嫌悪が滲む。

それがどうしてかわからなくて、隠れて泣いていた幼い自分。

『ねえさん、ねえさん、どこ？さびしいよお……』

すすり泣く声に、今の自分の声が重なる。

『姉さん、どこにいるの？…どうしていなくなつてしまつたの？』

叫ぶ声に返る言葉はなくして、闇の中にただうずくまる。

胸を掻き鳴りたくなるような絶望に呑まれていると、ふ、と手に優しいぬくもり。

鼻腔をくすぐるのは、落ち着いた香の香り。

穏やかな声が、

「明日にはわかる…今は、眠れ」

囁かれた言葉に、夢のない眠りに落ちた。

まだ冷たい初春の空氣のなか、降りそそぐ麗らかな日差しが暖かい。

『ファンタジー・ワンド』正門。

人ごみでじつた返す大型テーマパークの前で朱雀は困惑していた。早朝から叩き起こされ、有無を言わさず連れて来られたのがここだつた。

昨夜の出来事とは程遠い場所に、連れて来た人間の顔を見下ろす。表情のない顔は真意がわからない。

「何だ」

愛想のない聲音で聞かれ、一瞬慌てるが、ふと名前を聞いていなかつたことに気づく。

こちらの名前は知られていたから聞く機会がなかつた。

「ねえ、僕は君なんて呼べばいい？」

すると、言つていなかつたか、といふ咳きどきで、無造作に名前が告げられた。

「樹華樂。いつきかぐら樹でも華樂でも好きに呼べばいい」

「じゃあ、華樂ちゃん」

一番しつくり来る呼びかけをすると大きな瞳が瞪られる。

わかりやすい驚きと戸惑いの表情に、そんなに意外だつたか、と首を傾げる。

夜の闇のもとではわからなかつたが、朝の日差しの下で見ると、華

樂の容姿はずいぶんと幼かつた。

月白の腰まで届く長い髪と硝子玉の瞳は風変わりだが、纖細で優しげな面立ちも、華奢な体躯も中性的なきらいはあつたが、十一、三の少女にしか見えない。

服装も黒のカットソーに黒のミニタリー・コート、ジーンズにスニー

カーと年相応だ。

髪をひとつにくくり、チョックのシャツにジーンズ、黒のスプリン
グコートを着た朱雀と並ぶと、年の離れた友人か、兄妹きょうめいか、という
雰囲気だ。

それゆえのちゃん付けだったのだが。

「……駄目？」

「……好きにすればいい」

了承に微笑う。

許可を出す表情はやはりどこか柔らかかった。

「うん」

うなずくとす、と入場パスポートが差し出される。
華楽は厳しい表情に戻り、確認してきた。

「いいのか。見たくないものを見ることになるぞ」
最後の確認だ、と念押しされる。

背後には楽しげな家族や友人連れの群れ。

そのなかで華楽の冷えた空気が浮き彫りになる。
こちらを見極めようとする瞳を真っ直ぐに見返して、

「連れて行つて」

パスポートを受け取つた。

『ファンタジー・ランド』は五つのゾーンに分かれている。

入り口の『ヒントラーンズ・ゾーン』。

未来の都市を模した『フューチャー・ゾーン』。

開拓時代のアメリカの雰囲気を出した『フロンティア・ゾーン』。

御伽噺をモチーフにした『ロマンティック・ゾーン』。

施設オリジナルのキャラクターの住む村をかたどった『ストーリー・ゾーン』。

五角形の敷地を五つに分けるそのゾーンの中心にそびえ立つのが童話に出てくるような美しい白亜の城だ。いくつもの尖塔を持つ城は優美で威風堂々としている。

華楽は無言でその城に向かつて突き進んでいた。

迷いのない足取りに疑問を呈すことは憚られ、無言で付いていく。やがてその足は城内を見学するアトラクション、『キャラッスル・ツアー』の列の最後尾で止まり、しばし無言で並ぶ。

いつもなら平氣で数時間待ちが出るアトラクションだったが、平日、それも開園してすぐとのことで順番は間もなく回ってきた。

『ホワイト・キャラッスルへよひこなー。しかし残念ですが今日は姫のお出迎えはありません…』

高い女性の声がアトラクションの説明をする。

悪者にとらわれた姫を、観客が勇者となつて救うストーリー。

城の中に入ると、悪役に占領された城らしく、薄暗い。

案内役のスタッフに従つて、他の客と共に順路をたどる。

轟く、恐ろしげな声。

……姉はいつも笑顔だった。

『朱雀!』

快活な笑顔で、こちらに向かつて腕を広げる姉の姿が脳裏によみがえる。

抱きしめてくれる、細い腕。安心できる、温かな胸。

醜い大きな顔を持つ魔物が、煙を吐き出して観客を威嚇する。

保育園のお迎えはいつも姉。

忙しい両親に代わって、朱雀にとつては姉が一番大きな存在だった。

朱雀と萌黄は父親が違う。

未婚の母が姉が中学に入つてから再婚して義父ができた姉は、その環境に多少なりとも含むものがあつてもいいはずなのに、異父弟である朱雀に限りなく優しかった。

手を引かれて歩む帰り道、

『今日は保育園で何をしたの?』

優しく聞いてくれる姉の声が、大好きだった。

光る小人が、さやひさやひと甲高い声で笑った。

暖かくて、大きな存在。

その表情に翳り^{かけ}が見え始めたのは、いつだつただろう。

自分は確かにそれを見ていたはずなのに、覚えていない。

『おやすみなさい、朱雀』

いつものように寝かしつけられた翌日、姉の姿は消えていた……。

それ以来、姉の消息を語るものは何もない。

残されたのは、かすかな思い出と、今首に下げている鍵だけ。

ぐい、と腕を掴まれて、我に返る。

薄暗い光に、硝子玉の瞳が浮かび上がる。

「はずれるぞ」

低い声でそう囁かれ、観客の列を離れて向かったのは従業員出入り

口。

STAFF ONLYの文字を無視して華楽が扉を開ける。
必要最低限だけ隙間を空け、なかに滑り込んだ。

扉の向こう側。

夢の世界を支える空間はそつけない白とグレイでできていた。

白々とした螢光灯の明かりが廊下を照らし出す。

夢から覚めたような心地で立ちすくむと、腕を引かれ、走り出す。迷いのない華楽に引かれるままいくつかの角を曲がり、階段を下り、突き当たりにたどり着いた。

刹那、爆発音がおきる。

粉塵が上がり、床の一部が抜けていた。

驚きに目を瞠る間もなく、

「行くぞ」

華楽に腕を掴まれ、穴に足を踏み出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0492z/>

恋罪花～罪に咲く花～

2012年1月14日21時45分発行